

島根の中山間地から Work as Life

第2回

理解と見立てと西郷さん

野中 浩一

息子の見立て ～医療の現場に宛てた手紙～

父が死んだ。

4月に不調を訴え、7月には冷たくなって棺に収まった。

ここ8ヶ月の間に、祖母が亡くなり、飼い猫が亡くなり、父が亡くなった。

94歳と72歳（14歳）と73歳の死。これまで何十年にもわたり私の近親で亡くなる者がなかっただけに、来るべき時が来たということなのかもしれない。

人口減少社会の中で、私40代。これまでは意識せずに維持されてきたものごとによって次々と変化が生じていることを感じている。

悲しみはあまりない。なくなったという感覚が希薄だからであろう。その割に昔の父の姿を思い浮かべることは増えたように思う。

熊本の農家の本家長男として生まれ、10代にして田舎のしがらみと農業とを捨てて出ていき、「田舎が大嫌い」であり「人に頭を下げることは絶対しない」と言っていた父。そんな父は都会での消費生活を満喫し、「人生に後悔はない」と言って憚らなかった。

一切病院に行くことがなかった父。

4月、お腹の張りとお通の困難を訴え、それでも病院には行かないという。病院で診てもらった方がいいという母との水掛け論に私が呼び出された。私が母に「本人が（病院に）行かないと言ってるからええやろ。昔からいつ死んでもいいって言ってんだから」と言うと、「お前、親になんてこと言うんや」と父はいつものように声を荒らげ、しかしその数日後、病院に足を運んだ。

子どもの頃を振り返ると、企業で管理職を勤め仕事熱心ではあったものの、酒と煙草、パチンコ・競馬・競輪とを好む、亭主関白な父であった。

私が小学5年生の頃、朝、地元の小さな百貨店の裏口に並んでいた時のこと。その日はプラモデルの新作が出るとあって、20～30人くらいの小・中学生が整理券を求めて開店前から列をなしていた。その時たまたま仕事中の父が通りかかり、そして私が列に並んでいるのを見て「お前何しとるんや」とかなりの遠方から持ち前の大声を飛ばしてきた。並んでいた子どもたちがざわつく。私は面食らって、いいからあっちいけと無言のサインを出した。すると父はおもむろにその場に並んでいる子どもたちに向かって「みんな、浩一（筆者）のことをよろしく頼むぞ」とより一層の大声を残し、機嫌良さげに歩き去っていった。

ロ八丁で道楽者、はた迷惑で風来坊。一方で自分なりの不器用な義理人情を秘めているという意味では、男はつらいよの寅さんや、こち亀の両さんなど昭和の男性像と重なるものがあるかもしれない。父には「お前なにを偉そうに言っとるんや」と言われそうであるが。

父は誰にでも遠慮をしない。それが入院中であっても。「おい、〇〇買ってきてくれ」「お前どんくさいやっちな」とお世話になっている看護師さんであれお構いなしである。担当の若い女医さんや看護師さんたちは、私に直接言わないながらも、父に手を焼いている、もしくはどう関わっていいか分かりかねている様子であった。以下はそんな状況の中で、病院の先生方に宛てて私が書いた手紙である（一部削除箇所あり）。尚、この手紙については、父の死後、母の了承を得て公開に至っている。



<はじめに>

5月30日（日）15時過ぎ、父と話をする機会をいただき、その際に感じたことを記録しました。まずは父が病院の皆様にご迷惑をおかけしている点をお詫びいたします。この点は父の特性が大いに関係していることでもあるため、その点も踏まえ、息子としての今後の見通しをお伝えするためにこの文章を書きました。

<父の現状>

入院前の父は、便が出ず食べられないことを苦とし、「食べられるようになりたい」が主訴でした。手術により人工肛門での便通が可能となり、食事ができるようになった一方で、癌であることを知り余命を意識している現在の主訴（優先順）について、下記であろうと推察します。下記の4点は、息子としてこれまで父の人生を見てきた様々を加味して順位づけしています。

- ①長く生きたい、死にたくない
- ②できる限り苦しみたくない
- ③面倒なことはしたくない、できる限り世話してもらい楽をしたい
- ④美味しいものが食べたい、ある程度の身体的自由は欲しい

現在は食事も摂れるようになり、軽口が出るくらい気持ちが上向いていると感じています。医療職員の皆様の技術と献身的な看護および言葉かけのおかげと感謝しております。

「治療をせず退院すると比較的自由が利くが死期が早まること」、「治療をすると延命はできても長らく苦しむことになること」。この①と②との矛盾により、進むことも戻ることも難しく、ただ先生や看護師さんの優しさに甘えながら、父は今この瞬間の感覚に従い③を享受している状況だと感じています。

<父の生来>

父は昔から、規範に従いにくく、面倒なことを避ける特性を持っていました。家業（農業）の手伝いもせず高校も中退し放蕩していた10～20代。結婚・就職してからも賭け事やお酒のことでトラブルを重ねた30、40代。突然家を捨て蒸発した50代（10年近く母と別居が続き、60代で何事もなかったかのように戻り、母の借りていた住宅に居座った）。表面的な「言葉」を駆使して、「その場しのぎ」を続けてきた長年の経緯があります。

本人の口癖は「わしゃもうすぐ死ぬからいい」「お前に迷惑はかけん」です。裏を返せばそれだけ生への強い執着があり、（理屈では分かりつつ）周囲の迷惑には鈍感であったろうと思います。このような気質のため、母が父に長年にわたり入院や死亡時の保険を何度も勧めても一切取り合わず、本人は何の備えもないまま今回の入院となっており、家族としては「やはりこうなったか…」という思いがあります。

ただし誤解のないように一言添えおくならば、この記述をしている私（息子）自身は、決して父のことを嫌いではありません。

<家族としての考え・今後の展望>

以上より、本人の気持ちを大事にして進むほかないながらも、これまでの父の生き方のパターンを考えるに、できる限り面倒を避けながら入院生活を続け、結果的に治療することにするもすぐに断念し、進むも戻るもできず行き詰まるような気がしています。また、入院生活が長くなるほどに病院へのご迷惑が増すことも懸念しています。

私個人としては、本人がすでに 70 歳を超えての末期癌であることから、抗がん剤による治療よりは、福祉+医療という形で、いずれかの施設でターミナルケアをお願いできたらいいように考えています。同じ境遇の集団の中で癒し癒されつつ、ある程度の QOL を保つ中で生活ができたらいいように考えています（そのような施設が県内のどこにあるのか、その費用がいかほどかは分からない現時点での考えです）。

ただし、父はこれまで終末期医療どころか医療との接点がほぼありません。そのため、このまま「本人の意思」で進む場合、現状（③）を享受できるところまで享受して、延命を求めて抗がん剤治療に移行し、その治療の辛さに耐えかねて退院（②）、そしてバタバタと家族が世話をする（または施設に入る）という流れになるかと思っています。この場合、過程としては本人の意思を尊重しているようでありつつ、一方で結果（死の間際までの想定）としては QOL を損ねかねないとも考えています。ただし、本人は旧来から周囲の言葉で考えを変える性格ではないため、選択肢はこの 1 点（本人の気分と流れに任せるのみ）であろうとの見通しを私は持っています。

<お願いしたいこと>

以上のことから、父は、治療の点では先生方に言われたことを行うと考えています（①より）。また、歩行訓練など生活上の不便が改善されることや、美味しい食事が摂れる可能性については前向きに取り組めると考えています（④より）。一方で排便の処理などの面倒なことは自分でやる気は全くなく（③より）、むしろ看護師さん方にお世話してもらってコミュニケーションを楽しむことが 1 つの生きがいとなっているように思います。また、買い物をお願いするなどの過大な要求についても、この場所ではどこまでの要求が通るか模索しながら、人との交流を楽しんでいるものと考えています。

そのため、「できることはできる。できないことはできない」とはっきり言っていただき、入り用については母（または母を通じて私）にお伝えいただければと思っています。九州熊本の気質で言葉は荒く感じられると思いますが、強く言っていただいて大丈夫です。このように歳をとっても難点の多い父であり、その一家です。また、コロナ禍で大変な最中、このような長文で無理難題を申してすみません。息子の一意見として、今後の父の方向付けの参考にしていただけると幸いと考え、父と話した感触を文

章にしました。よろしくお願いいたします。

以上、病院の先生や看護師さんにとって、父との関わりの見通しの一助になるようこの手紙を書いた。誰にでも関白ぶりを発揮する父について、息子なりの理解と見立てによる取り扱い説明書である。

見立て論と西郷さん

人を治療したり支援したりする上で、「見立て」がどのような意味を持つものか。よい機会なので、昔読んだいくつかの文献を読み返してみた。

精神医学における「見立て」には「治療者（医者、カウンセラーを問わず）の意欲も含めて、もしもこの人に自分が関わるとすれば、どのような角度から切り込み、どのような経過が予想され、予後はどうなるの、といった見通しが含まれます」との言葉が示すように、「見立てと診断の間には、似たような意味とともに微妙な差」がある。

また、見立てる上では正しいかどうか以上に、共感的に理解し、相手を尊重しながら、一緒に伴走し、行く先を照らしていくことも肝要である。

「見立てとは、基本的に相手を尊重して、その人間像をつくり上げる作業」であり「相手の不安を理解しつつ相手を尊重するという作業は、容易なもの」ではない。ひきこもりの息子の相談を受ける際、「お父さんこそ、子どもです！」といった見下した態度や、「お母さんに問題がありますね」といった指摘は、たとえそれが凶星であっても、有害な結果になる。

こうした支援者側の問題点は「深刻な状況に直面して、あまりにも多くのことが目に入ってきた結果、そこに登場する一人一人の立場や苦悩を、真に「共感的」に理解する余裕をなくしている」ことにある。「心理の専門家として関係者の現実に厳しい目を向けながらも、同時に人を立てる」ためには「一人一人の努力に対するねぎらいの気持ち」が大切である。

さて、ここに引用させてもらった『臨床心理学② 診断と見立て [心理アセスメント]』は、たしか10年ほど前に立命館大学大学院を受験するときの必読書籍となっており、ほか何冊かと一緒に購入した記憶がある。

閑話休題、『新訂 方法としての面接 臨床家のために』の中で土居（1992）は、精神科的面接において人を深い意味で「理解する」ために「まず第一に何でも彼（か）でもわかったつもりになるのを止めることから始めねばなるまい」としている。「何がわかり、何がわからないかの区別がわからねばならな

い」そして、断片的な情報を集めることではなく、「患者を一人の人間として全体的に理解する」ことを目的として「事柄の間の関係が見える」ことが大切であるとしている。

こうした「理解」や「見立て」についての言葉を集める中で、私自身、どこまで父のことを理解して今回の手紙が書けたか、振り返らざるを得ないと感じている。最も身近にいるからこそ、理解したつもりでいたり、見えていないことも多かったのではないだろうかとも。

亡くなってみて父について知らないことが多々思いあたるようになったが、その中の1つに「西郷さんの像」の謎がある。私が物心ついた時から常に飾ってあった、身の丈30cmくらいの、観光土産に売っていきそうな青銅色の西郷隆盛像である。

私の父は昔から物を持たない。クローゼットのたくさんの服やネクタイと、サイドボードのウイスキーやブランデー、それと西郷さん。それしか長年持ち続けた物を知らない。何度かの転勤を経て服や酒は入れ替わっていったが、西郷さんだけは変わらずずっと家にあった。私が大人になり実家を出てからは(その間も父は何度か住まいが変わっている)西郷さんがどうなったのか意識することもなかった。

7月に父が亡くなり、もはや誰も由縁を知ることのないあの西郷さんが父の鞆から出てきたと母が教えてくれた。私はそれを貰い受け、しかしわが家にちょうどよい置き場が見当たらず、今はわが娘たちのわずかばかりの盾やトロフィーの後ろに並べて置いている。

<語句注釈>

Work as Life

西洋的にワークとライフを二分法で分けるのではなく、日本人が旧来から文化としてきた生活の中に労働を含み、「無理なく続けられることを、生活の中に入れ込み複数行う」考え方。百姓。東洋的であり、オンとオフの区別をつけない、「仕事の中にいながら生きている」「それがストレスなく生活と一致している」こと。メディアアーティストで、タレント、大学准教授でもある落合陽一氏が著書の中で提唱。この言葉を、著者が目指す生き方の方向性としてタイトルに据えた。

診断と見立て

一般財団法人日本心理研修センター監修による公認心理師現認者講習会テキスト [2019年版] によれば、精神疾患の診断には事例定式化(ケース・フォーミュレーション)の側面と、ICD-10やDSM-5などのカテゴリカルな範疇分類の側面があるとしている。また、事例定式化(=見立て)とは、「クライアントの意識的・無意識的な問題や不適応(感)を心理面・現実的な生活面からとらえ、それらの背景にある要因を整理して介入へとつなげる総合的評価」であるとしている。

<引用文献>

土居健郎(1992)「新訂 方法としての面接」医学書院

一般財団法人日本心理研修センター監修(2018)「公認心理師現認者講習会テキスト [2019年版]」金剛出版

氏原寛・成田善弘共編(2000)「臨床心理学② 診断と見立て [心理アセスメント]」培風館